

私の一冊

社会福祉学科 立花明彦 先生

加藤恭子編 『私は日本のここが好き！ : 外国人 54 人が語る』

小鹿図書館 : 302.1/Ka 86 (出窓社)

人にはそれぞれいろいろな1冊があることと想像します。もちろん私にもそれがあって、自身の進路に大きな影響を与えた1冊、あるいは人生の転機につながる思い出深い1冊、学生時代の私の心に平安をもたらしてくれた1冊……と、1冊とは言いながらも、意味合いを異にする複数の1冊があります。そんな中から今回は、その書名に引かれ、読書欲を注がれた「最近の1冊」を紹介することにしました。別の意の「私の1冊」、それをお話するのはまだ時期尚早というもの、またの機会に譲ることとします。

さて、今年もこの1年の出来事を振り返る時期になりました。2008年を思い起こしてみると、本当にいろいろなことがありました。それにしても、今年ほど人の命が軽んじられると同時に、人間不信に陥る事件が多く発生した年もないでしょう。東京秋葉原の連続通り魔殺傷事件、中学生による東名高速道路でのバスジャック、大阪や千葉で起こったひき逃げ死亡事故、老舗料亭による食材の使い回し、食品の産地偽装、中国産食品の薬物混入、そしてテロを思わせた元官僚ならびにその家族を狙った殺人……。本当に人々を震撼させたり、理不尽な事件ばかりです。日本人でありながら、日本人の心が読めなくなり、ただ、恐怖と不安だけが増大していきます。いったい日本は、いつからこんな社会になっていったのでしょうか。時間的な速さと文明による便利さばかりを追求してきた代償として、私たちはこれまで日本人として大切にしてきたもの、守ってきたこと等を失いつつあるように思うのです。そんな思いでいるとき、目に留まったのがここに紹介する1冊です。今の日本を憂う私には「私は日本のここが好き！」の語に違和感を持ちながらも、続く「外国人 54 人が語る」に引かれました。そう、日本へやってきた外国の方々には、この国がどう見えるのだろうかとの関心があったのです。

本書は、日本の各界で活躍中の外国人8人、および様々なきっかけで来日し、知日化となった46人の合わせて54人の外国人に「この国が、日本人がどう映りますか？」「日本への注文は？」等を尋ね、その答えをまとめたものです。インタビューに応じた人々は、多彩な文化的職業的背景をもち、出身国もアフリカを除くほとんどの地域が網羅されていて様々。年代も20歳代から99歳とこれまた多彩となっています。

では実際、彼らは日本をどう見ているのでしょうか？

インドからやってきたモハマド・ラフィさん、日本の仕事の進め方は正直で大変精密、そして

繊細、適当に済ませることがないと言っています。日本の製品は精巧にできていて丈夫、加えて品質の標示に偽りがなく、信頼することができる。周りの人たちと仲良くすること、正直に生きること、礼儀正しくすること、誠実であることを日本人はもっていると語っています。一方、「現代の若者にはもっとよく働いてほしい、今の若者は仕事も好きだが遊ぶことのほうが大事なように見える、昔の日本人がどんなに自分の仕事を大切に思い、がんばって働いていたかを忘れずにいてほしい、世界から受けてきた日本の仕事への尊敬を失わないようにしてほしい」と現代人へのエールも忘れていません。

童澄教(中国)さんは、日本に対する好ましくない気持ち、疑いの心もちながら来日しました。しかしながら実際に日本人と接する中で、日本人は同情心、慈しみの感情をもち、誠心誠意をモットーとしている人々と認識し直しました。さらにアンドレアス・ツィアマキス(ギリシャ)さんは「日本は正直で信頼でき、誠実で慎み深い。すぐには友好的に接しない、心を開くには時間を要したが、一度気持ちが通い合うと生涯の友人になると実感した」と話しています。「自らの文化と歴史に誇りを持ち、日本の貴重な文化的遺産をよく見、学び評価するために時間を費やせ」と注文をも口にします。

とはいえ、全ての人々がこのような称賛の言葉ばかりを述べているわけではありません。

馮秋玉(台湾)さんは、気遣いのある国で心遣いの風習が好きと言いますが、心配な点をも指摘しています。それは、6年前の来日に比べ、日本社会が悪くなっているとの印象をもつと語り、街が汚くなった点、臭いがする、治安が悪くなった、社会の悪化や劣化が進み、ルールを守るという日本の良さが失われていると述べ、警告を発しているのです。また、ヨゼフ・ピタウ(イタリア)さんは、開かれた心、向上心を失ったと言います。その上で、金で何でもできる、世界で傲慢になった、お金があっても見せない、しゃべらない、相手のことを考え、相手よりも低く見せようとする謙遜の美しさを失ったと指摘。女性のスカートの丈が短くなっていくことにも心配しています。

とはいえ、全体を通して共通する声は、日本人は正直、誠実、謙虚、繊細であること。より良いものを作り出そうとする向上心、伝統的技術や文化を継承していく国民性を挙げていることです。本書での外国人が挙げた「日本の好きな点」のいくつかは、既に失いかけている点もありますが、日本に生まれた者にとって、これまで当然と言われてきた常識やモラルがいかに貴重で価値のあるものだったかに気づかされます。インタビューに立ち会った人々は異口同音に「日本人であることの誇りが自分の中からふつふつと沸いてくる感覚になった」「これからの生き方までも変える大きな経験になった」「自分の中にも確かにあった日本人らしさを強く意識する」とその感想を述べています。また編者は、本書を「外から見た主に日本の美点に送る 54 の花束」とも言っていて、その比喩に爽やかさを覚えるとともに、少しばかりの元気をもらった気分になります。

来る 2009 年、“外の眼”による日本再発見をし、54 の花束を枯らすことのないよう、穏やかで平和な年を築いていきたいですね！